

丘の上の大きな木

光野 朝風

丘の上の大きな木

ある丘の上に一本だけ目立つほど大きな木がありました。

その木は不思議な木で、年中いろいろな実をつけます。

その木はとても優しい木で、鳥たちや、小さな動物たちに実を分け与えていました。

傷をおった動物たちが傷を癒す場でもありました。

雨の日も、嵐の日も、大きな木は一生懸命、動物たちの巣や休んでいる動物を、体を張って守ります。

ある日、とても傷ついた鳥が空から落ちてきました。

大きな木におそわれて、ようやくたどり着いたのでしょうか。

枝に引っかかったときにはもう命の灯火が消えそうなほどでした。

大きな木は、その鳥を一生懸命治してあげようと思いました。

大きな木は木の葉で鳥のためにベッドを作ってあげ、葉のついた枝で雨や風から守ってあげました。

大きな木は言いました。

「私があなたを守りましょう。おなかですいたのなら果実をついばみなさい。今は何も考えずに、ゆっくりと傷を癒すのですよ」

鳥は大きな木の優しい行いに少しずつ元気になりました。

大きな木は言いました。

「傷が癒えたのなら飛び立ちなさい。私はここから動けない。でもあなたをいつも想っている。あなたをいつも心配している。私はいつも命を分け与えている。もし近くにおいて嵐が来たのならここに来なさい。嵐が去るまで守ってあげよう」

鳥は言いました。

「大きな木さん。でももうあなたはたくさんの嵐にあって、傷ついていますよ」

大きな木は言いました。

「ぼろぼろになっても大丈夫。私は根のあるかぎり、どんなことになってもまた枝を伸ばしたり葉や実をつけたりすることができる。鳥さん、いつも私がここにいることを忘れないで。私はいつもここにいる。しっかりと根を張っているのだから」

鳥は言いました。

「大きな木さん。僕には幸せがあります。この大空を旅して色々なものを見て回ることです。僕には小さいけれど翼があります。僕は大人になったばかりだから、色々わからないことが多いけれど、仲間の話じゃ、大きな宮殿や、信じられないほど大きな生き物や、この世のものとは思えないほど美しい石があるというんだ」

大きな木は言いました。

「小さな翼で空を羽ばたくことがあなたの幸せなのですね。もう少しであなたは羽ばたくことができます。大空には危険がたくさんあるとたくさんの鳥たちは言います。気をつけるのですよ」

鳥は言いました。

「大きな木さんは飛べないの？空を飛べたら楽しいのに」

鳥が言うと大きな木は言いました。

「ごらんください。あなたのまわりを。私にはたくさんの動物たちがいる。私を頼ってみんなここに来るのです。それに私はこの大地に根を張って生きています。根を張って生きるということは

、すべてに感謝するという事です。わたしにとって、土も空も風も、どれひとつなくなっても生きていけないのですから。あなた以外の鳥たちも、たくさんのがいが巣をつくり、幸せそうに生きようとする。私はそれを見ているだけで幸せです」

鳥は「そうなんだ」と大きな木の果実をついばみながら言いました。

鳥は言いました。

「大きな木さん。僕の傷はもう癒えたよ。ありがとう。僕は旅に出なきゃいけないんだ。僕には翼があるからね」

そう言って、大きな木の果実をもう一つ、ついばんでから飛び立っていきました。

ある日、少女を連れた親子連れが大きな木の元に来ました。

少女は木を見上げて「大きいねママ」と言いました。

ママは少女に言いました。

「あんまり触ったり転がったりしちゃダメよ。大事な洋服が汚れてしまうし、手が汚くなるわ」

少女はママに言いました。

「この木は傷ついているところがたくさんあるよママ」

ママは少女の手を引きながら言いました。

「危ないからあまり近寄っちゃダメよ。折れた枝で怪我をしたらどうするの」

「うん」と言いながらママに手を引かれ、少女は大きな木から離れていきました。

少女はママに聞きました。

「ママはあたしが怪我をしたとき、たくさん心配してくれて、早く治ってねって言うけれど、どうしてママは、あの大きな木を心配したり、早く治ってねって言わないの？」

ママはにっこりと笑って言いました。

「ちゃんと心配しましたよ。ママはあの木が早く治りますようにって心で祈ったのだから」

もちろんママの言うことは嘘でした。

ママはこれっぽっちも思っていなかったのです。

少女の服や手が汚れていないか、とても気にしながら、大きな木から去っていきました。

ある日おじいさんが来ました。

大きな木に触れて「こんなに傷だらけじゃしんどいだろう」と私の幹をぼんぼんと叩きました。

おじいさんは大きな木に薬を塗り、包帯を巻きました。

大きな木はおじいさんにお礼を言いました。

「また元気になります。ありがとう。本当にありがとう」

おじいさんは木の根元に座り、空を見ながらサンドイッチを食べ始めます。

おじいさんは「ちょっとお前さんの実をもらってもいいかね？」と大きな木に聞きます。

優しい大きな木ははじめて不安そうに言います。

「わたしの実はみんなのものです。ご自由に食べてもよいですよ。わたしの実を食べると、みんな幸せだと言います。でも全部持って行ってはいけません。動物たちのぶんもちゃんと残して欲しいのです。幸福は誰か一人のためのものではなく、みんなのものなのです。最近、知らない人がよくここへ来て、たくさん実を持って行ってしまい、他の動物の分がなくなってしまうのです。その人は私のことをたんまりお金を宿すお金の木だと言っていました、わたしにはよくわかりません」

おじいさんは困った顔をしながら言いました。

「最近街で大人気のジャムがあつてね。そいつはいちやく大金持ちになったんだ。わしなんかや、高くて買えないがね。そうか、あいつめ、ここから採ってきていたのか。なに、わしは

少しパンに挟んで食べようとおもっただけだよ」

「それならどうぞ」と大きな木は言いました。

おじいさんは、いつつほど実を採ってパンに挟んで食べました。

「ふむ。甘くて優しい味だの。お前さんのことはよくわかった」

おじいさんはサンドイッチを食べ終わると大きな木に「ひとつ聞いていいかね？」と言いました。

「わたしに答えられることならなんでも答えますよ。優しいおじいさん」

と大きな木が言うと、おじいさんは聞きました。

「お前さんはどうしてこんなにボロボロになっても、一生懸命尽くすのかね。お前さんはたくさんものをあえて抱えようとしている」

すると大きな木は答えました。

「わたしにはやらなければいけないことがあります。嵐の日に折れた大きな枝の下敷きになり。少女を殺してしまったのです。少女の体は土に返り、わたしが吸い取ったのです。少女の魂は私の中でいつまでも生きています。わたしは奪った命の分以上に、命を育てなければいけないのです。わたしは奪った幸福の分以上に、幸福を育てなければいけないのです。たとえ傷ついても、わたしは幸せを守らなければいけないのです」

「ふむ」と言いながら、おじいさんは言いました。

「しかしお前さん。幸福とは何かを知っているのかね？」

大きな木は答えました。

「根を張ることです。だから私は生きていられる。だから私の中にはたくさんのお前の魂が宿っているのです。おじいさんの幸福は何ですか？」

おじいさんは何も言わずににっこりとしながら、大きな木に巻いた包帯をさすりました。

「あの少女の魂がちゃんと生きているということがわかっただけでも、わしは充分幸せだよ」

おじいさんはふところから古ぼけた写真を取り出しました。

そして嬉しそうに少女と若い頃のおじいさんが写っている写真を眺めていました。